

攻撃する行為としての拍手：チベット僧院の問答修行の拍手

矢向，正人
九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門

<https://doi.org/10.15017/4113198>

出版情報：芸術工学研究. 33, pp.39-54, 2020-11-01. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：

攻撃する行為としての拍手

チベット僧院の問答修行の拍手

Clapping as an Act of Aggression:

Clapping in the Practice of Monastic Debate in Tibetan Buddhist Monasteries

矢向正人¹

YAKO Masato

Abstract

In Tibetan Buddhist monasteries, distinctive hand clapping sounds not found anywhere else can be heard during the practice of monastic debate. When a question is raised, the questioning monk makes a strong sound by holding out his left hand and clapping his right hand vigorously against it. Then the answering monk sitting on the floor turns to the questioner to give an immediate response. The questioner strategically and menacingly makes clapping sounds in order to win the debate. To an outside observer, these handclaps appear to be offensive and express negative emotions, in contrast to applause which expresses joy or praise. This paper examines the reality and the meaning of the act of clapping in Tibetan monastic debate from the perspective of the negative expression mechanism of clapping. After introducing references to the act of clapping in monastic debate by practicing monks and Tibetan Buddhist scholars, a video analysis of clapping is used to examine the specific gestures and types of clapping that are used. Next, the aggression and negative emotional responses to monastic debate clapping are examined based on interviews. Finally, how monastic debate clapping should be understood and positioned in the context of the various other acts of clapping is discussed.

1 はじめに

手を拍つ行為は、古くから儀礼として、コミュニケーションの手段として行なわれてきた。今日では、人は手を拍って喜びを伝えたり賞賛したりする。他方、手を拍って発せられる音は騒音にもなるため、円滑なコミュニケーションにとって、それが妨げになる場合がある。手を拍って警告を発したり、怒りや嘲りのようなネガティブな感情を表現したりすることもある（楊・矢向 2020: 9-29）。手を拍つことが、騒音と認識されるのであれば、それは非言語コミュニケーションにおける通常のジェスチャのあり方とは意味づけを違えて、考察されなければならない。本稿は、チベット仏教の問答拍手を俎上に載せ、拍手のこのあり方を検討する。

チベット仏教の修行僧は、僧院における問答修行の最中に頻繁に手を拍つ。問いを発するときに、問い掛ける側（問者）が、前に出した左手に、右手を勢いよく拍ち付けて音を発し、その音に合わせて問いを発する。問いを発した後に、手を拍つときもある。答える側（答者）は、座ったまま問者に即答する。こうして僧院は、手を拍つ音と、問答の声で騒がしくなる。問者は手を拍って、答者に答えを促しているように見えるが、攻撃的なメッセージを与える効果もあると考えられている。

問答拍手は、今日、他では見ることができない特徴的な手拍ちであり、拍手行為のさまざまなあり方を検討するためには欠かせない¹⁾。本稿は、拍手が持つネガティブな表現メカニズムという観点から、問答拍手について考察する。まず、第2節と第3節で、修行僧と研究者による問答拍手への言及を紹介した後、第4節で、問答拍手の

連絡先：矢向正人, yako@design.kyushu-u.ac.jp

¹ 九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門
Department of Communication Design Science, Faculty of Design,
Kyushu University

成り立ちや意味について概説する。続く第5節で、問答拍手の拍ち方を映像分析により検討し、第6節と第7節で、問答拍手の持つ攻撃性とネガティブな感情反応のあり方についてインタビュー調査と先行学説の検討を行う。第8節では、それらを踏まえ、問答拍手を拍手行為としてどう認識し位置づけるべきか考察を行う。

2 修行した僧侶による問答拍手の記述

問答拍手は、チベットを訪れた人々にどのように認識されてきたのだろうか。まずは、長期間チベットで修行を積んだ僧侶による言及をいくつか挙げてみよう。

2-1 河口慧海

黄檗宗の僧侶であった河口慧海(1866~1945)は、1900年にインドからチベット入国を果たし、1901年ラサに到着する。セラ寺院に入学した河口は、問答修行にも参加している。その経験が『西藏旅行記』に次のように記されている。

問答は我が国の禅宗のような遣り方とは全く違って居るです。それは余程面白い。また非常に活発である。甚だしきは他から見ますとほとんど彼は喧嘩をして居るのではなかろうかと見らる程一生懸命にやっています(河口 1978:40)。

河口には、問答拍手は争いごとをしているように見えていたようである。河口は、手が拍たれる具体的な状況についても記している。

その問答の遣り方の面白さ及び力の入れ方、声の発動、調子、様子というものがどうも実に面白い。まずどういう風になって居るかと言うに、^{こたえて}答者は図面にあるごとくに坐して居る。すると問者の方は立ち上って数珠を左の手に持ちしずしずと歩んで答者の前に立ちます。そうして手を上下向い合せに^{といて}拵げ大きな声でチー、チー、タワ、チョエ、チャンと言ってぽんと一つ手を拍ちます。そのチー、チー、タワ、チョエ、チャンというのは(〔はじめのチーは〕)文殊菩薩の心という〔種子〕真言なんです。すなわち文珠の本体である智慧の開けんことを祈るという意味で、始めにかような言葉を発して、それからチー、タワ、チョエ、チャンというのは、このごときの法においてという意味で、すなわち宇宙間如実の真法において論ずというので、それ

から問答を始めるです。＜中略＞今問答が言葉を発すると同時に左の足を高く揚げ、左右の手を上下向い合わせに拵げて、その手を拍つ拍子に足を厳しく地に打ちつける。その勢いは地獄の蓋も破れようかという勢いをもってやらなくてはならんというのであります。またその拍った手の響きは、三千大千世界の悪魔の胆をこの文殊の智慧の一声で驚破する程の勢いを示さなければならん、その問答の教師は常々弟子達に対して教えて居るです。そこでその問答の底意は、己れが煩惱の心を打ち破って己れが心の地獄を滅却するために勇氣凜然たる形をあらわし、その形を心の底にまで及ぼして解脱の方法とするのであります(河口 1978:40-43)。

20世紀初頭の問答拍手を記した文章であるが、今日、チベットで目撃することができる問答の手拍ちとほぼ同じ拍ち方であるため、後述する欧米の研究者にも引用されることがある。しかし、問答拍手は、問答修行において慣習として存在し、こう拍たなければならないとテキストで明文化されているわけではない。



図1 河口慧海『チベット旅行記(三)』講談社 p. 42

思い思いに教科書にない事やら世間門の事やら種々の問答をやります。その問答がまた余程人智開発に与って力がある。で戸外で問答をやっている時は、一つの級に五十人あろうが百人あろうが、まず問者一人に答者一人ではかの者はそれを見聞して居るというだけ、もちろん折には問者も変りまた答者も変るですが、それは一組きりです。ところがこの法林道場の中へ這入るとそれが一人一人みながやるんです。そうして上級下級に論なく老僧が小僧と問答するという有様です。ですからその手をたたく音は澁々と霰の降り乱れるごとく、戦場における鉄砲がばちばち響いて居るようなふうに聞えて居る（河口 1978:45-46）。

問答拍手は、見物人が大勢いる中でも拍たれている。河口は、問答は上の級でも下の級でも混雑になって励むもので、身分が高い僧侶に対して、低い僧侶が手拍ちを伴い挑みかかることもあると記している²⁾。

2-2 多田等観

1913 年にチベットに入りセラ寺で修行した多田等観（1890～1967）の『チベット』にも、問答拍手に言及している箇所がある³⁾。

法苑に學徒が集合すれば、そこに十三の圓陣ができる。13 學級の圓陣である。そしてその各々の圓陣の中央に、一人の學僧が立ちあがり、他の一人の學僧は下座している。立ちあがっているのは問者で、坐っているのは答者である。問者は同級生即ち同一圓陣内の者が順次に立つのである。彼は數珠を頸にかけ兩手を打ち、問の調子をとる。宛も日本に於ける商人の競り賣りの恰好に似てゐる。議論が酣になると、兩人が組打つやうなこともある（多田 1942:35）。

多田は問答の様子を、競り売りと表現しているが、激しい身振りとしての拍手については書かれていない。長年チベットで修行を重ねた多田は、あえて問答の実践における拍手の特殊性を記述しようとしなかったのではないかと考えられる⁴⁾。

2-3 ゲシェー・ラプテン

他方、1930 年生まれでセラ僧院で 10 年以上修行したゲシェー・ラプテンは『チベットの僧院生活』で、問答

拍手のあり方と意味を、詳細に描いている。

たぶん、もっとも明確な特徴は手の動きだろう。問答をこれから始めようとする時はまず文殊師利の種子である「ディー⁵⁾」という叫びをあげて右の手のひらを左の手のひらに叩き落とすのだ。そうしてこんどはその右手を後ろに引きもどしながら左手を前に突き出す。この時の左手の動きは三つの悪趣への再生を閉め出すことを象徴しており、後ろに引きもどす右手のほうはすべての衆生を解脱へ導き上げようとする意志を象徴するものなのだ。しかし、この意志をまっとうすることはたやすいことではなく、そのためには偉大な知識と智慧を持たなければならない。そこで「ディー」と唱えて文殊師利に智慧の雨を降らせてもらうようお願いするのだ。普段の会話でも、本当に他を感動させる言葉は、耳に快くもありまた耳の痛い言葉でもある。それと同じように、「ディー」の種子は文殊師利を特殊な効力で動かしその偉大な慈悲の力で私たちに智慧と理解力を授けてくれる。問答には二人の人間が必要である。答えをするものは座り、質問をするものは立って、後者が疑義を持ち答者に恭しく問答を挑むのだ（ラプテン 1984:69-70）。

ラプテンは、手を拍つことは問答修行の実践において意味をもつ行為であり、またその意味を現実化させる効果を持つが、手拍ちは必ずしも快い行為ではないと述べる（ラプテン 1984:70）。ラプテンはこの他にも問答拍手について記述しており、それらはどれも本稿の検討のために有益な情報を提供している。

2-4 ダライ・ラマ 14 世

問答の拍手が見られるのは、セラ寺のみではない。インド、モンゴル、台湾のチベット寺院でも問答が行われている。ダライ・ラマ 14 世は、自伝のなかで次のように言及している。

まず質問をするとき、質問者は右手を頭上に上げ、伸ばした左手をぴしゃりと打ち、左足でどすんと床を踏む。ついで右手を左手からずらすようにはずし、相手の頭に近づける。質問されたほうは冷静に集中して質問に答えようとするだけでなく、自分のまわりを絶えずぐるぐる歩きまわっている相手に対して質問を投げ

返すのだ。この討論で大切なのは機知^{ウィット}であり、相手の命題をユーモラスに自分に有利にもってゆく才気が高く評価される。このため、曲芸的なまでに知的なやりとりなどわからないと思われる、無教育な民衆の間ですら、この討論は人気のある娯楽の一つになっていた(ダライ・ラマ 2001:58-59)。

問答拍手の攻撃性や意味づけについては、修行した僧侶であっても意味づけは一つではない。ダライ・ラマ 14 世は、問答に伴う激しい身振りを、ネガティブな感情ではなく機知とし、その中の一つの所作として拍手について述べている。しかし、淡泊な記述であり、手を拍つという行為そのものについては、あまり重視していないように読める。

3 欧米の研究者による問答拍手への言及

問答拍手は、チベット寺院で修行したり訪れたりした人ならば誰でも見ることができるが、研究となると少ない。しかし、欧米の研究者によるチベット問答に関する研究書の中には、手拍ち動作の詳細とその意味について客観的な記述を意図した箇所がある。

ダニエル・パーデュー(Daniel Perdue)は『チベット仏教における問答』で、問答拍手の身体動作を、次のように記述している。

最初に問答を見たとき、もっとも印象的な特徴は、手の仕草である。問者が結果を述べる時、両掌をパチンと拍つことで最高潮に達するような視覚的に目立つ一連の動作を行う。問者が座っている答者に最初の質問をするとき、右手は肩の上の頭の高さで保ち、左手は掌を上に向けて前に伸ばす。問者は陳述の最後に、両掌を拍ち合わせ大きな音を発すると同時に左足を踏み鳴らすことにより区切りを付ける。それから彼はすぐに右掌を上に向けて引き、同時に左掌を下に向けて伸ばす。この拍手と引きの動きは、2 つの鋭い動きではなく、舞踊家のそのような動きの流れで行われる(Perdue 1992 : 29)。

以上は問答拍手の標準と認識される身体動作であり、後述の論者により引用されることが多い。

ジョージズ・ドレイフス(Georges Dreyfus)は、問答修行の実践についての研究書『両掌の拍手の音：チベット

仏教僧の教育』で、問答の拍手を主題的に取り上げている(Dreyfus 2003)。チベット僧院で研鑽を積み自らを仏教僧と呼ぶドレイフスは、広範な資料を検討し、自伝的記述をはさみながら、拍手の実態とあり方に言及している。また、インタビューなどを試みながら、修行者の立場と研究者の立場の双方から、問答修行について客観的記述を試みようとする。

マイケル・レンバート(Michael Lempert)は、『訓練と問答：チベット僧院における暴力の言語』で、人類学の立場から、問答拍手のあり方について論じている(Lempert 2012)。レンバートは、拍手行為を含む問答が持っている攻撃性や暴力性にも目を向け、それらへの批判的言説を交えつつ、修行における意義と有効性を論じている。同書はあくまで問答の陳述内容とその実践に関する書であるが、長期間のフィールドワークにもとづく実証的な検討と、現地の人々が記述しにくい見解もあえて呈示する記述姿勢は、問答拍手の検討のために価値のある情報を提供している。

本稿では、ラプテンの書と以上の3 著とに加え、ホセ・イグナシオ・カベゾン(José Cabezon)、フォッケ・シールクスマ(Fokke Sierksma)、さらに中国の研究者の言説も参照して検討を進める。

4 問答拍手の概要

まずは、問答拍手を成り立たせている制度や拍つことの意味、問答中における手拍ちの展開や戦術などについて整理しておく。

4-1 問答拍手の制度と作法

チベット仏教の僧侶は、問答を繰り返すことにより修行を行う。ラプテンは、問答の必要性について、「誤った見解を退散させるための弁証法的な手段として存在する。＜中略＞間違った考えを持つ人が次々と主張せねばならなくなってしまう数々の矛盾点を明示するために使われる」(ラプテン 1984:67-68)と述べる。問答には、毎日午後に寺院のどこかで行う問答、法会での問答、学位を取得するための問答などがある。問者の僧侶は通常一人、答者の僧侶も通常一人であるが、複数の問者が問いを発するときもある。彼らは同時にもしくは代わる代わる問者の役割を果たす。法会や学位取得の問答では、審判員が臨席することもある。問答は同級クラスの僧侶間で行うのみならず、上下級のクラス間でも行われる。上級を目指す試験では、上下の級にかかわらず、候補者

に挑むことができる。

問答拍手は、問答による実践的な学びを効果的にするために拍たれる。問答拍手は、現在、チベット仏教における、ニンマ派、カギュ派、サキヤ派、ゲルク派のどの宗派でも拍たれている。ドレイフスによると、かつて、ゲルク派では、僧院と僧院、異なる宗派間で問答を行うこともあったが、現在では、ほとんどの問答は同一僧院内で実施される(Dreyfus 2003:212)。但し、同一僧院内において、他の学堂との対抗戦のような問答集会が行われることはある⁶⁾。

4-2 問答拍手の意味

問答で手を拍つことの意味は何だろう。左右の手の動きには、それぞれ意味が与えられている。まず、拍手の後に、左手を前に突き出すときの左手の動きは、ラブテン等によれば、「三つの悪趣への再生を閉め出す智慧」の象徴であると認識される(Sierksma 1964:137, ラブテン 1984:70, Perdue 1992:29, Dreyfus 2003:217)。パーデューは、この智慧は左手を引き戻すのみならず、問答拍手における左手そのものの意味であるとする(Perdue 1992:29-30)。シールクスマは、この左手動作について、問者が左手で何かを押しのかたり締め出したりしているような印象を受けると述べる(Sierksma 1964:137)。他方、右手を胴方向に引きもどすときの動きにも、ラブテンの「衆生を解脱へ導き上げようとする意志」の象徴であるとの認識に、研究者間の合意がある⁸⁾。

では、これらの意味を持つ右手を左手に拍ちつける意味は何だろう。その解釈は、論者により多少異なる。まず、河口は、手を拍つことは、智慧の一声と同じように、左手のもつ智慧を現実化し、悪魔の胆を驚破する効果をもつと述べる⁹⁾。また、ラブテンは、手を拍つと同時に発する「ディー」という叫びの意味について述べたあと、拍つことはディーの現れであると述べる(ラブテン 1984:70)。河口やラブテンは、手を拍つことにより生じる効果について述べているが、あくまでも拍つことによる効果であり、手を拍つということの象徴的な意味ではない。また、パーデューとドレイフスは、手を拍つことは、左手の智慧と右手の意思との結合であると述べる(Perdue 1992:30, Dreyfus 2003:217)。パーデューは、ラティ・リンボチェの口頭解説を引用し、掌を合わせることによる智慧と実践の結合は、手首における微妙な智慧の風路と関係すると述べる(Perdue 1992:30)。レンパ

ートは、拍手と足踏みとは、慢心を崩壊させ悪い転生を閉鎖するものであり、左足を踏み鳴らし手を拍つときの波打つ音波(sgra)は、仏の教えが広がる共鳴音であると述べる(Lempert 2012:55)。しかし、いずれの見解においても、手を拍つという行為が、左手と右手が持つような象徴的な意味でなく、それらを現実化させる効果として認識されているといえることができる。なお、カベソンは、手を叩くことは、学問と宗教の修行の完成を象徴するとも述べている(Cabezón et al. 2019:257-258)。

4-3 問答における拍手の展開

問答する僧侶は、何も持たずに議論の中庭にやってくる。議論の場に本を持ち込むではない。問者は、問答の始めの段階では、うまく議論が運ぶように答者を尊重するように見せ、しばしば答者の前に屈んでお辞儀をするような仕草をする。そして、「ディー! 現実を見よう(ありのままの姿を見よ!)」と叫ぶと、陳述を始める(Dreyfus 2003:218)⁷⁾。ドレイフスによると、問者は、落ち着いたトーンで問答を開始し、はじめは手の内を見せず、答者に偽りの安心感を与える(Dreyfus 2003:218)。その後、答者が誤りや不適切な陳述をしたとき、激しく拍ちかかる。

そこから問答は急転回する。問者は、答者の陳述を、伝統的な教義内容に合致していないとして批判を開始する。着座した答者は、それに応じて、落ち着いた断固たる態度で説得しようとする(Lempert 2012:50)。しかし、問者の批判が激しくなると、答者の立場は危うくなる。問者は、攻撃的仕草、および突き刺すような鋭い言葉を用いて、批判をさらに強めていく(Dreyfus 2003:219)。答者をからかうような身体動作も見られるようになる。

この段階になると、問者は背をピンと伸ばし、派手な身振り動作を伴いながら、声をあげて力強く手を拍ち、判断力と論理の強靱さを見せつけようとする。謙虚な装いは、強い自信に置き換わる(Dreyfus 2003:218)。大きな音で手を拍つために、袈裟の一部を脱ぎ、腰に挟む(Sierksma 1964:138)。さらに、叫んだり、「プッ」と声を立てたり、軽蔑的な仕草、批判めいた仕種をする(Sierksma 1964:138)。言葉もうるさく、「聞いて、はい、聞いて、はい」などと言う。音は短く鋭い。答者がためらうと、問者は、強く手を拍ち、「さあ、さあ」と叫ぶ(Sierksma 1964:138)。

問者が答者を批判する身振り動作は、拍手だけではなく

い。まず、足を踏み鳴らす動作が、ほとんどの場合に拍手に伴う。この他、答者の肩を把んで、揺さぶることもある。また、ゲシェの試験などで、答者が間違った陳述をすると、その間違いを答者に知らしめるために、答者がかぶっている帽子をつかんで取りあげ、答者の頭上でそれをぐるぐると3回まわすことがある(Dreyfus 2003: 218)。

4-4 法会における問者の戦略

問者は答者を手拍ちで批判するときに、答者にどれほどの距離をとるのだろうか。拍手による批判と攻撃の度合いは、問者と答者の位置関係にもかかわる。レンパートは、年次問答における自らの体験を、以下のように記述している(Lempert 2012:70)¹⁰⁾。問答が始まると、問者は、答者に向けて手を拍つための方向と距離を確保し、答者の数フィート前で足を止める。この優位性を持った位置から、問者は一旦後退を始める。2人目の問者が彼に加わっても、彼らはこの後退を続ける。そして彼らと答者との間に距離を保ちながら、答者に問いを発する。最初の攻撃的手拍ち(taunts)が鳴り響くと、この距離は狭まり、それ以後は、最初の手拍ちと同じ位置まで彼らが後退することはない。問答が勢いづき、攻撃的身振りが頻発するようになると、手を拍つ位置が答者に近づいていく。それは問答する空間の縮小であるのだが、そこに一連の前進と後退が見られる。レンパートは、前に出たり後ずさりする動きは、続けざまに攻撃的手拍ちを行うために必要な動作であり、向きを変えたり歩き回するなどしながら、周期的あるいは劇的に答者に接近を試みる振る舞いは、問者の戦術でもあると述べる(Lempert 2012:70-71)¹¹⁾。

問答の最後の10分間、攻撃的身振りの頻度が最も増加するとき、問者は答者から数フィートの距離を保つ。こうして、問者は答者にぐっと接近し、手拍ちの効果を高めるとともに、答者の不安をかきたてる(Lempert 2012:71)。以上は、年次問答における一例であるが、問答拍手が戦略的に拍たれていること、答者への接近が威嚇になることが読み取れる。

4-5 他の修行僧と見物人

問答は、他の僧侶や見物人たちが大勢いる中で拍たれる。問者と答者のやりとりが平穏なものである段階では、彼らの声は、観客にはほとんど聞きとれない(Dreyfus

2003:218)。しかし、問者が批判を始めると、すぐに拍手の音と身振り動作は、他の僧侶と見物人の注意を引きつける。問答では、迅速に答えることが求められるため、答者が押し黙っていたり、戸惑いをみせると、他の僧侶は大声で笑う(Sierksma 1964:140)。一斉に声をあげ、答者に答えを促すこともある。答者が答えないと、問者と聴衆は彼をからかい始める。それでも声がないと、他の僧侶が介入し、答者の代わりに答えることもある(Cabezón et al. 2019:258)。

5 手拍ちの実際

次に、問答拍手を、手を拍つ身振り動作という観点から見てみよう。手は具体的にどのように拍たれているのか、拍ち方にどんな種類があるのかについて検討する。そのため、筆者がこれまでに視聴した動画をもとに、さまざまな問答拍手の拍ち方を構成してみる¹²⁾。検討で対象とした手拍ちは、ラサ市の色拉(セラ)寺、ラサ市の哲蚌寺(デプン)寺、昌都市の強巴林(チャンパリン)寺、甘肅省夏河県の拉卜楞(ラブラン)寺、甘肅省碌曲県の郎木(ランムス)寺、青海省西寧市の塔爾(タール)寺、青海省貴南県の陀楽寺、四川省色達県の喇榮五明佛(ラルンガル)僧院、四川省巴塘県の措普寺、北京市の西黄寺、ブッダガヤの徳噶寺、高雄市の古嚴寺における問答場面の動画に現れるものである。

5-1 標準動作

問答拍手の標準的な動作単位を次のように認識する。

(予備動作) → 前動作 → 手拍ち → 後動作

予備動作：

問答が始まると、答者は座り、問者はその前に立つ。問者は、陳述とともに、歩き回ったり答者の顔を覗き込むなど、落ち着かない。問者は手を拍つことを決めると、一旦、答者の方を向き、背を伸ばして立ち、2歩ほど後退して構えを作る。問いを発するときには、左足を前に出し地面を踏みつけ、右足は後ろに伸ばす(Cabezón et al. 2019:257)。

前動作：

・**右手前動作**：右手を肩の上の頭の高さで保つ。シールスクマは、頭より少し上に保つとしている(Sierksma 1964:137)。この他、頭上後方に手を大きく振り上げる¹³⁾、

胴の後方に手を回してから振りかぶって頭上に手をあげる、頭の右横で肘を曲げて構え少し後方に引く、胸の高さに保つなどの例が見られる。右手前動作により、手拍ちに先立つ動きの大きさが作られる。

・**左手前動作**：左手を前方に伸ばす。掌は、上に向ける、右に向ける例が見られる。この他、片合掌から前方に伸ばす例¹⁴⁾、伸ばさない例も見られる。

・**付随動作**：振りかぶるときに、左足を最大で50cmほどあげる。左足をあげると、胴体は少し後退する。このときに振りかぶると、胴は少し右横を向くことになる。左足をあげない例も多く見られる。

手拍ち：

・**タイミング**：質問の言葉の切れ目、陳述の切れ目に拍つ(Perdue 1992:29)。

・**動作**：右手で左手を拍つ動作が標準であるが、実際には、強い音を発するために、左手を反対方向から少し動かす例も見られる。左手を動かさず、右手のみで拍つ例は、ゆっくりした動作で拍つ場合が多い。

・**方向**：斜め上から前方におろして拍つ。その角度は、垂直におろす例から、水平に伸ばす例まで、さまざまである。右側から水平左方向に拍つ例もあるが、標準動作ではなく、前動作や後動作が省略された拍ち方である場合が多い。

・**手の表裏**：右の掌で左の掌を拍つ拍ち方が標準であるが、右手の甲で左掌または甲を拍つ拍ち方がある。この拍ち方については後述するが、セラ寺弁経場における問答でも、右手甲で左掌を短い間隔で2回続けて拍つ例が確認された。また、後述の集団問答拍手には、右手甲で続けざまに拍つ例が数多く見られる。手の甲で拍つと強い音が出にくい。

・**付随動作**：手拍ちと同時に左足を踏み鳴らす。この動作の結果、上半身が少し答者に近づくことになる。

後動作：

・**右手後動作**：右掌を上に向けて引く(Perdue 1992:29)。拍った後に胴に引きつけるまでの動作がひとつの動作単位である。引きつけた状態は、構えができて安定である。拍った後にそのまま伸ばしていき、その後に手前に引きつける動作が自然であり例も多く見られる。拍った後にすぐに引きつける動作は、続けざまに拍つための予備動作である場合が多い。この他、右手を伸ばしたまま引か

ずに終わる例も多く見られる。拍った後に、掌を左に向けそのまま伸ばす、そのままゆっくり答者の顔に近づけていく、そのまま答者に近づけていき答者の頭上の空間を撫でるようにする、すくい(跳ね)あげるように答者に近づけていく、手の甲を答者に向け近づける、そのまま伸ばしグルリと右側(左側)に旋回させる、掌を上に向けたまま保つ、掌を上に向けたまま右から左に動かす、頭上までもち上げる¹⁵⁾、そのままおろすなどの例が見られる¹⁶⁾。この他、引きつけざまに再度軽く拍つ例、勢い余って右手が左側に流れる例などが見られる。

・**左手後動作**：左掌を下に向けて伸ばす(Perdue 1992:29)。拍った後に右手と交差させる動作が自然な動作であり例も多く見られる。左右の手の交差に伴いさまざまな動きが作られる。交差の後に前方に伸ばしていく動作が、右手を引く動作と同時にであると自然に見える。伸ばす動作に左横に払うような動作が加わる例がある。交差して終わる例もある。その他、左掌を、上に向ける、少し左に向ける、問者の胴に向ける、問者の胴で片合掌、答者に向けるなどの例が見られる。左腕については、問者の胴近くで回す、問者の胴に当てる、問者の胴の後に回す、問者の胴に向けたあと答者に向け伸ばす、垂直に持ち上げるなどの例が見られる。前動作からずっと動かさない例も見られる。

・**付随動作**：手を拍つ時点よりも1~2歩後退する例が多く見られる。

5-2 動作の強調と変形動作

この他、標準動作を強調する動作から変形動作まで数多くの動作が見られる。それらの一例を挙げておく。

・**不意打ち**：左右の掌を均等に拍つ通常の拍手は、不意打ちとして拍たれている例が多い。また、至近距離での不意打ちとして、左足をあげずに頭上から下方に垂直に大振りに拍つ例がある。

・**動作の大きさを印象づける後動作**：左足を踏み込み頭上から下方に垂直に大振りに拍った後に、右手を再び頭上まで持ち上げ、動作の大きさを視覚的に印象づける拍ち方が見られる。

・**攻撃性をやわらげる後動作**：例えば、拍った後に、右手を前方に伸ばしてからすぐに左手側に寄せ交差させ胸に当てる。左手は胴の後に回すが、このときに顔を少し下げ答者に近づける。こうすると攻撃性がやわらげられた問いかけに見える。

・手拍ちの変形動作：手拍ち後に両掌をあわせたまま保つ¹⁷⁾、左手から拍つなどの変形動作が見られる。

・予備動作と前動作における変形動作：右手を2回上下させ反動をつけ3回目に拍つ¹⁸⁾、振りかぶる動作を2回繰り返してから拍つ、ひとくさりの陳述を終えてから改めて振りかぶって拍つなど、予備動作から前動作に至る動作に、変形動作が見られる。前動作が長ければ、答者は後続する手拍ちに余裕を持って備えることができる。

・他の僧侶の介入：問答拍手は問者と答者のみに閉じない。座して観戦している大勢の僧侶のうちの数人が、掛け声とともに連続して手を拍っている例が見られる¹⁹⁾。

5-3 3回連続する手拍ち

ドレイフス等は、問者は「チー、チー、チー」という言葉で強調された3回連続する手拍ちで答者に答えを促す(Dreyfus 2003:213, Lempert 2012:69)と述べる²⁰⁾。この拍ち方については後述する。手拍ちを連続させる場合、3回で完結させる例が多く見られる。しかし、動画視聴によると、上例のように、同じ拍ち方を繰り返すのみならず、拍ち方を一回ごとに変える拍ち方が多数見られる。例えば、まず、前方に進み出て拍ち、すぐに後を向き頭上から叩きつけるように拍ち、再び前を向き振りかぶってゆっくりと拍ち拍ち方が見られる²¹⁾。すなわち、2回目で、1回目と対照的に拍ち、3回目で切れ目を作る拍ち方である。拍ち方は3回とも異なるが、それらを連続させることにより一つの型を作っている。振りかぶって勢いよく拍つと、後動作の段階でバランスを崩しがちであるが、この崩れを次の前動作の一部に取り込み、続けざまに拍ち拍ち方は、コンテンポラリーダンスの身体移動のような動作に見える。なお、4回以上連続する手拍ちはあまり見られない。

5-4 集団問答拍手

複数の修行僧を問者とする問答拍手は、その場の勢いに任せて拍つのではなく、あらかじめ規格化された一連の動作があり、拍つタイミングを問者間で計っているように見える²²⁾²³⁾。このために拍手の攻撃性がやわらげられているように見える。また、動画で見る限り、手拍ちは、答者に答えを要求するのみならず、リズムを作り、問を作る役割を果たしているように見える。複数の問者が同じ問いを発するときには、この手拍ちのはたらきが効果的になる。また、後動作が伴わない例、後動作があっても、

左手を伸ばさずに右手をそのまま前方に伸ばすのみの後動作である例が見られる²⁴⁾。

集団問答拍手では、問者全員が手を揃えて拍っているのではない。一人の問者の手拍ちに、他の僧侶が追随する場合がほとんどであり、従って、揃わずばらばらに拍たれる。但し、一人の問者が集団の中で中心となって問いを発するときには、集団拍手の攻撃性が倍増する。他方、中心となる問者に、側にいる問者が手拍ちを促している例もある。いずれの場合も、手拍ちの間隔が徐々に短くなり、音は強さと鋭さを増すことになる。

5-5 集団問答拍手にみられる特徴的手拍ち

・手の甲による手拍ち：集団問答拍手では、後述する手の甲による手拍ちの例が数多く見られる(Lempert 2012:69)。はじめに右掌で1回拍った後に「ツァー、ツァー」と声を立て右手甲で短い間隔で2回拍つ例²⁵⁾²⁶⁾が多く見られる。また、後述するように、短い間隔で、右手の甲→左手の甲→右手の甲の順に3回連続して拍つ例も見られる。この他、4回連続する手拍ちにおいて、2回目に右手甲、3回目に左手甲で拍ち、4回目を通常に戻す拍ち方²⁷⁾、また、1回目に右手甲、2回目に左手甲で拍ち、その後、両手を上から振り下ろす拍ち方²⁸⁾などが見られる。左手の甲を拍ち拍ち方では、音は響かない。そもそも甲を拍ち動作は、上から叩きつける動作であるため、それを連続させると、拍ちにくくならざるを得ない。「ツァー、ツァー、ツァー」と3回声を立て、右手甲を拍ち動作を3回真似る例も見られる²⁹⁾。

・連続する手拍ち：集団問答拍手では、手の表裏にかかわらず、続けざまに拍ち手拍ちが数多く見られる。複数の問者がウォーと声を掛けてから短い間隔で続けざまに拍ち動作の例が多く見られるため、標準的動作とする。拍ち方をそれぞれ違える例も多い³⁰⁾。ウォーと声を掛けてから左足をあげ、手を拍たずに右手を上から垂直に下ろす動作もある。この他、10人の問者が、拍たずに右手を振り下ろす動作を3回行った後に振りかぶって拍ち例³¹⁾などがある。連続する手拍ちは、問答全体の終了時にも見られる。問者全員が3回連続で拍ちた後、順番に一人ずつ弱めに手を拍ちていく例である。手を拍ちただけで振りかぶる動作がないため、儀礼的な身体動作と考えられる。

5-6 賞賛の拍手との区別

見物人としての他の僧侶により、問答拍手と通常の拍

手とは、明確に拍ち分けられている。問答全体の終了時における表彰の場面で、問答拍手とは別に、純粋な賞賛の拍手と掛声が生じている例³²⁾、問答の終了時に見物する僧侶により賞賛の拍手が拍たれている例³³⁾³⁴⁾が見られる。

6 攻撃性の認識

6-1 攻撃的手拍ちの3種

問答拍手は、強く鋭い音により拍たれるが、レンパートによると、とりわけ次の3種の手拍ちが、特に攻撃性が強い拍ち方として認識されている (Lempert 2012:69)。3種の拍ち方にはそれぞれ意味があり、多くの場合、声を発して拍たれる。

(a) 右手の甲で左掌を拍つ

問者は、答者の反論が間違っていると判断すると、「ツァー」と叫び右手の甲を左掌に拍ちつける。「ツァー」には複数の解釈がある。シールクスマは、「間違った!」の意味であると述べる (Sierksma 1964:139)。他方、パーデューは、「びっくりだ!」「終わった(=負けだ)!」の二つの解釈を示す (Perdue 1992:125)。「びっくりだ!」は、答者が前の言葉を打ち消す陳述をしたとの言い立て、「終わった!」は、答者の負けが決まったとの言い立てであり、ドレイフスも「終わった!」としている (Dreyfus 2003:381)。他方、レンパートは、「恥を知れ!」と解釈する。

(b) 右手の甲で左掌を拍ち左手の甲で右掌を拍つ

問者は、答者の反論が支離滅裂であることを言い立てるとき、手の甲でもう一方の掌を拍つ仕草を左右交互に行う。「仏典を滅茶苦茶にしてる」と言って拍つこともある (Lempert 2012:69)³⁵⁾。

(c) 続けざまに拍つ

問者は、答者が答えをためらうと、「チー」と叫び続けざまに手を拍ち答えを促す。

右手の甲で左掌または甲を叩く仕草は、動画でも見ることができ、シールクスマは、この動作を真似てみると、手の甲がかなり敏感になり、痛みを伴い熱をもってくと述べる。そのため(a)の手拍ちは意味が何であろうとも、明らかに攻撃的な行為であると述べている (Sierksma 1964:139)。ドレイフスは、高飛車な示威行為や侮辱的な皮肉がしばしば観察されるのは、(a)の手拍ちにおいてであると述べている (Dreyfus 2003: 218-219)。他方、レンパートは、(a) (b)を比較し、(a)の手拍

ちの後に(b)の手拍ちが生じやすい傾向を指摘し、(b)の支離滅裂の言い立ては(a)の矛盾の指摘よりも厳しい批判であると述べている (Lempert 2012:69)。

他方、(c)のためらいを咎める手拍ちは、陳述の内容を直接批判する手拍ちではないので、(a) (b)とは区別されるべきである。但し、レンパートは、問者はしばしば、答者の陳述の切れ目に、続けざまに手を拍つことにより、答者の記憶の乏しさや無能を言い立てることがあると述べている。

以上の(a) (b) (c)は、強い攻撃性を持つと認識される手拍ちであるが、通常の間答拍手にも、この3種の手拍ちの意味は内在する (Lempert 2012:69)。

6-2 僧侶へのインタビュー

問答拍手は、動画で視聴すると、攻撃的に拍たれているように聞こえるが、手を拍っている問者の内面を覗くことはできない。そこで、拍手が、現実の感情とどう対応しているのかについて、修行僧にインタビューを試みた。九州大学芸術工学府博士後期課程に在籍していた楊鵬は、本研究の一環として、2019年11月18日に四川省カンゼ・チベット族自治州のラルンガル僧院を訪れ、読経が行われているとき、僧侶にインタビューした。その模様を次に記す。

楊：僧侶たちの間では、拍手で怒り、嫌悪とかの否定感情を表していますか。

僧侶 1：もちろんありますね。教典を激しく検討する時に、拍手で大きな声を出したりして、反対の気持ちを表しています。

楊：僧侶たちは拍手のみで、反対の気持ちを表していますか？先に話したように、拍手以外に、胸を叩いたり、地団駄を踏んだりしていませんか？

僧侶 1：そうです。そんなこともしています。坊さん二人で経典を激しく言い争っている時、お互いに体がぶつかり合いますよ。

楊：そうですか。そんなことまでしていますか。

僧侶 1：そうですね、でも、このようなことは極めて少ないですね。そんな時は、寺院長は監督者に、寺内の規律を維持してもらいますよ。

楊：嬉しいときから不機嫌になったときに、拍手で表現したことがありますか。即ち、気持ちが変わったとき、拍手で表現していますか。

僧侶 1：これはよくわかりませんね。そんなことには気づきませんが、一般的には、怒りや喜びというような単純な気持ちを拍手で相手に伝えています。

11 月 20 日に楊は同寺院で、別の僧侶にインタビューを試みた。

楊：師匠は仏法を伝授する時、もしも弟子がなかなかわからないなら、焦って怒りますか。

僧侶 2：もちろん、怒りますよ。でも、それは仏法を説明する一つ的手段ですね。本当に怒っているとは思えません。

楊：もし、怒った時には、拍手をしますか？

僧侶 2：はい、拍手します。でも、普通は、仏法を伝授する場合、弟子に理解してもらいたいとき拍手します。

楊：語気を強めるためですか？

僧侶 2：そうかもしれません。

楊：要するに、日常的に弟子に仏法を解説する場合、たまに拍手することがありますね。それは、弟子に仏法を理解してもらえないとき、拍手でイライラしている気持ちを伝えているのでしょうか？

僧侶 2：怒った時に拍手をするのは個人の行為だと思います。

楊：でも、先に師匠のおっしゃった通り、その怒りは本当の意味の怒りではなく、仏法を伝授する一つの表現方式ですよね。

僧侶 2：そうです。これは仏の分身みたいですね。慈悲の菩薩相があって、目を怒らせる明王相もあります。でも、すべては仏法の表現で、皆さんは表情が違いますけど、心は同じように平和で、円満の境界に入っています。

6-3 ネガティブな感情の有無

問答のやりとりにおける、怒りや嘲りなどのネガティブな感情の生起について、僧侶や研究者間で見解が一致しているわけではない。シールクスマは、修行僧との会話を以下のように記述している (Sierksma 1964:141)。修行僧は、「怒っているように見えるが、怒ってはいない。それは習慣である。初心者のおときは、問者はとても怒っており、恥ずかしいと思った。しかし、自分で問答を実践すると、それがただの習慣であることがわかった」と答えた。そこで、怒っていないことをどのように知るの

かと尋ねると、彼は、「私は満足感を得たから」と答えた。この修行僧は、「もちろん悪い性格の持ち主がいる」「答者を嫌っているとき、特に大勢の見物人がいるとき、屈辱を与えようとする衝動に駆られ、罵詈雑言を浴びせることがよくある」と述べ、そうした態度を非難したことがあると述べた。しかし一方、「それも慣習と伝統にすぎない」と述べ、そうしたことを真剣に受け止めたくない素振りも見せた。

パーデューは、問答における問者の攻撃的身振りは、答者がその知識を確たるものにするための学習手段の一つであると述べる (Perdue 1992:30)。実際、答者が的確で一貫した陳述をしている場合でも、問者は彼のスキルと説得力を駆使して、答者を騙し混乱させる。こうした進め方は、一見悪意に満ちているように見えるかもしれない。しかし、知識や智慧というものが論理の連続性の中に生み出されるのならば、どんな状況であっても、その知識は揺るぎないものでなければならず、もし答者が巧妙な問者によって正しい認識から引き離されることがあれば、答者の理解は確固たるものではないことになる。

さらに、問答は、混乱した答者に、正しい認識が何であるかを彼自身で把握させるよう仕向けなければならない。問者は答者にその矛盾を呈示するが、問者は答えを呈示することはない。問者自身が答えを知らずに問題を呈示することもある (Perdue 1992:31)。パーデューによれば、問答とは、能動的な知的運動であり、規定の教義を学んでいるのでも、過去の論争の繰り返しでもない。拍手は、この能動的な学びの効果を強めるものと認識されるのである。

6-4 屈辱の生成

しかし、問答には暴力的な側面があることも認識しておかなければならない。ドレイフスは、問者の陳述は断言的であるゆえに、問答にはいくらかの攻撃的な敵意や悪意が含まれるはずだと述べる (Dreyfus 2003:218)。パーデューは、問答では、問者は答者とは明らかに立場が異なると述べる。問者は、答者の主張に疑問を呈し、拍ちかかるが、そのことに対して報復を受けない。また、問者は、事前にセリフを練習したり、問答が有利に運ぶように話題をすり替えたりすることが許されているが、答者はそれらができない。答者は立ちあがることはないし、歩きまわることもない。

他の僧侶の介入により、答者はさらに心理的に追い込

まれる。問者の陳述に対し、答者の代わりに他の僧侶が答えてしまうことがある。それは答者にとって不名誉なことである。シールクスマは、答者が口ごもると、傍観する僧侶が声をあげ答えることがあるが、声高で強く、深く喉にかかったその声の叫びは、脅かすように聞こえ、聴衆が大笑いする声も、身が縮む思いがするものだと述べている (Sierksma 1964:139)。数百人の僧侶や修行僧の前で嘲り笑われるなら、ボロボロになることもある (Dreyfus 2003:218) ³⁶⁾³⁷⁾。ラプテンは問答で追い詰められいく心境について、「私は少しの誤謬も問答で起こさないようにしようと懸命になって努めた。そこには多くの博学な僧侶がいて、誤りをおかすと彼らに嘲笑されるのだった」(ラプテン 1984:178) と述べている ³⁸⁾。

もちろん、問答は問者の敗北に終わるとは限らない。ドレイフスによると、展開によっては膠着状態に陥ることがある (Dreyfus 2003:216)。問者の陳述が破綻し、何も言えない状況になると、問答は突然終わることがある。こうした展開が、公式の問答で生じると、問者は屈辱を味わう。問者は、無言の状態、苦痛の数分を、多数の見物人のなかに放置される。問者は、屈辱を避けるために、脈絡なく言葉を並べ立てるが、うまくいかないこともある。シールクスマによると、他の僧侶が、その状況に拍車をかけることがある。問者の攻撃が失敗したときに、他の僧侶が、もっと巧妙な陳述ができると判断すると、問者に近づき、手と肩で彼を押しのける (Sierksma 1964:140)。そのような場合、問者は反撃するかもしれないし、喧嘩になることもある。問答が終わった後も、こうした熱狂が燦ることがある (Perdue 1992:32)。

6-5 ゲームとしての問答

レンパート、ドレイフスは、問答における攻撃的身振りを演技性とゲーム性の観点から検討している。レンパートは、問答における問者の攻撃的振る舞いは、擬態としての暴力であり、演技であると述べている (Lempert 2012:126)。レンパートによると、問者が問いを発するときに答者に向けられるエネルギーは、強烈ではあるが拡散的なものであり、答者を直接めがけるものではない。そこには特定個人を狙い撃ちする攻撃とは異なる、間接アドレス性が認められる。さらに、問者に限らず、怒りを演じる僧侶には、「内なる」状態を「外なる」兆候から切り離し、感情をコントロールする自制が求められる。とりわけ、修行僧の道徳的な規律を監督する高位の僧侶

には、問答において、怒りのような「苦しい感情」を抑制することが期待されていると述べる (Lempert 2012:126) ³⁹⁾。

ドレイフスは、問答の応接における強い攻撃性に言及したあと、そのゲーム性を論じ、次のように概括している (Dreyfus 2003:221)。まず、問答の性格は対話的である。二者間のこのやり取りの過程は、事前に決定されておらず、即時の判断と選択に依存する。第二に、問答は対抗者に勝つことに向けられたゲームである。問者の目標は、答者の矛盾を突くことである。同様に、答者は、問者の議論の射程から逃れようとする。第三に、問答は、他のゲームと同様に戦略的である。問答の参加者は、議論における力量、または合法的なトリックのいずれかを用いて、対抗者を巻き込んでいかねばならない。しかし、このゲーム性や戦略性にもかかわらず、二者間のやり取りはどれも想像力をかき立てるものであるため、参加者と聴衆はいつも問答から新しい何かを学ぶことになる。そして、新規で微妙な識別を呈し、他方を出し抜き絶望的にみえる状況から逃れる行動は、驚異であると述べる (Dreyfus 2003:221)。

問答における攻撃的身振りは、欧米の研究者からは、識別力、集中力、判断力が必要な、知的な振る舞いであり、明朗な心と強力な分析スキルを要求する知的なゲームとして認識されているのである。

7 考察：拍手の意味の反転

本稿は、問答拍手について、ネガティブな表現メカニズムという観点から検討することを目的とした。以下、筆者による考察を述べる。

7-1 問答拍手の空間

問答拍手は、修行経験者のみならず、研究者や旅行者にも馴染みがある。例えば、ラサのセラ寺弁経場は、木々に覆われ、地面には砂利などが敷かれた広場である。そこで拍たれている拍手の動作は、音を伴いはするが、舞踊家のような動作の流れであり、動きの柔軟性、見た目の美しさなどは、身体を使った芸能やスポーツの所作のようである。拍つことは一連の動作の流れの一区切りとなり、身体動作にテンポや間を作るようにも見える。そうした問答のやりとりを、在家の僧侶や一般の人たちが観客として見ており、法会では、審判員から僧侶でない人々まで、会場はぎっしり埋め尽くされる。観客の多くは、このスリリングなやりとりを、楽しんでいるようで

ある。問答の演出は、ドレイフスやレンパートが述べるように、演劇イベントのような劇場空間を生み出している。まず、拍手が拍たれる問答の場に人は魅了される。

しかし、問答には、そこに収まらない暴力的な内包がある。問者たちは、答者に向けて激しく音を発しながら鋭く問いかけ、答者を攻撃する。(a)と(b)の甲拍ちや(c)の連続拍ち、レンパートが述べる答者への蹴り寄りなどは、答者を罵倒し威嚇する行為であり、この空間のバランスを崩し、イベント全体を不自然に見せている。この段階では、問者も答者も、問答を楽しんでいるようには見えない。時には、僧侶たちは本当に怒りや敵意を持ち、周囲の雰囲気害することもある。平和を好み超然としているはずの僧侶は、問答において、なぜこのように振る舞うのだろうか。

7-2 ハッと気づかせる拍手

問答拍手におけるこれらの攻撃性については、これまでの筆者の拍手研究の枠組みを用いて、説明できる側面と説明できない側面がある。新しい枠組みも視野に入れながら検討していこう。

まず、手を拍つことの意味である。問答に伴う動作は象徴的な意味を具現したものとして説明されるが、左右の手に意味はあっても、拍つことには明確な意味が説明されていない。ラブテンは、手を拍ち合わせることの直接的な意味には言及せず、同時に発する「ディー」のみに意味を見出す。パーデュとドレイフスも、手を拍つことは、左手の智慧と右手の意思を結合させると述べ、その効果のみについて記している。手を拍つことが、強烈なインパクトを与える行為であり音であるとしても、あくまで、問答の実践を促進する効果として認識されていることを、まず頭にとめるべきであろう。

さて、手を拍つことには、そもそもどんな効果があるのだろうか。まず、拍手には、拍つことにより、ハッと気づかせるはたらきがある。このはたらきは、問答拍手においても存在する。問者は手を拍ち、正しい回答を与えるのではない。拍つことにより、正しい回答に至る気づきのきっかけを与えるのである。答者が、他のことを考えていたり、何も考えていないように見える時に、問者がバシッと拍って不意打ちを食らわせれば、ハッと目覚めさせ、あるいは、答者のそれまでの思考の連続性を断ち切ることができるだろう。この気づきを効果的にするために、拍つタイミングがさまざまに図られるのであ

る。緩やかに拍つこともあれば、素早く拍つこともある。腕や手首の角度もさまざまある。すべてが正面切ってではなく、回り込んで拍つなどある。振りかぶって拍つときもあるが、前動作がない手拍ちもある。それらを同じ僧侶が即興的な判断で拍ち分け、ハッと気づかせるのである。音を伝えるだけではない。速度や角度が、気づきを効果的にする。

ハッと気づかせる拍手は、派生的に、拍たれている空間とその広さを知らしめる効果がある。ポンポンと手を拍ち人を呼ぶときのような、拍手の、見えない空間を可視化させる効果について、筆者は『古事記』の「天の逆手」を例にとり論じた⁴⁰⁾。それらは手を叩くことの本来のあり方を検討するときに欠かすことができない。ハッと気づかせる効果、拍たれている空間を知らしめる効果は、問答拍手が持つ効果としても、確かに存在する。

7-3 陳述を締める手拍ち

しかし、気づきの拍手だけでは、問答拍手に伴う攻撃性を説明することはできない。問者が答者に対して攻撃を仕掛けていくときに、拍手はどんな役割を果たしているのだろうか。それを知るためには、問者が答者に向けて手を拍つときの方向やタイミングについて検討しなければならない。レンパートは、攻撃的身振り(taunts)が増加するにつれて、問者が答者に対してとる距離に変化が現れるとし、打撃の瞬間に答者にもっとも接近すると述べる。拍手音が接近して拍たれるとき、座っている答者に否応なく伝えられるのは、空間の広さの感覚ではない。そこで知らしめられるのは、拍手音と問者が向かってくる方向と接近の感覚である。問者はそのルートをとどり答者に近づき痛烈な拍手をするのである。両者に空間の広がり認知されていても、それは決して安定してはいない。

手拍ちに伴うこの接近の感覚の生成は、手拍ちとともに発せられている言葉とも関連する。ラブテンも述べるように、問者が手を拍ち大きな音を発するのは、陳述の最後の言葉が発せられたときである。すなわち、問者は、手拍ちにより、陳述によって突きつけた批判的内容を、再度答者に思い知らせるのであり、手拍ちによってこの批判のとどめを刺すのである。実際、多くの手拍ちでは、一連の言葉と身振り動作が、手拍ちの瞬間を目掛けてなされているように見える。こう考えると、問者が答者に向ける手拍ちは、それに先立つ陳述に対して、それらを

締め括る役割を持つということができる。

さて、拍手には、拍つことにより、物事の締め括りを確認する拍手がある。日本でよく拍たれる「手締め」や「手打ち」は、イベントや話し合いが無事に終わったことを参会者全員で承認する締め括りの拍手であるが、筆者は、この種の拍手が、洋の東西を問わず古代から存在することを確認している(矢向 2016:38)。問答拍手において、この締め括りの拍手が、問者の陳述が終わったことの宣言、あるいは終わったことの確認として拍たれると考えることができる。

7-4 罵倒拍手の成り立ち

別の側面から検討してみよう。問答拍手でも特に攻撃性の強い3種の拍ち方には、それぞれ意味が与えられていた、(a)右手の甲で左の掌を拍つ(=間違っている)、(b)右手の甲で左の掌を拍つ・左手の甲で右の掌を拍つ(=支離滅裂)、(c)続けざまに拍つ(=ためらいへの咎め)である。

まず、(c)のためらいの拍手は、上に述べたハッとさせ気づかせる手拍ちの延長線上で考えることができる。ここで、ハッとさせるのは、正しい回答に気づかせるのではなく、回答しない答者自身に気づかせる、あるいは、時間が無為に経過することに気づかせるのである。問答は、議論の運びについてのこうした咎め立てを挟みながら展開するのである。

次に、(a)の「ツァー」、すなわち間違えの言い立てを考えてみる。間違えを指摘するとともに答者の負けを言い立てるこの手拍ちのはたらきは、気づきを促すことではない。それは、間違えの言い立てにより、問者の勝ちと答者の負けという結果を断言する拍手である。(a)の拍手のこのはたらきは、むしろ上に述べた締め括りの手拍ちの延長線上で考えることができる。陳述のやりとりが問者の勝ちに帰着したことが、締め括りの拍手により、答者のみならず、周りの観客にも主張される。それは拍手が果たす基本的な役割でもある。

しかし、(a)の間違えの言い立てについては、締めくくりの拍手だけで説明することはできない。手締めや手打など締め括りを確認する拍手は、あくまで、当事者間の合意形成の標として拍たれる手拍ちであり、当事者双方の有利化を確かめ合う拍手として拍たれている。ところが、(a)の間違えの言い立ては、問者の有利化、答者の不利化を宣言するために拍たれている。矛盾や敗北を認め

させるのであれば、合意形成にはなりえない。

さらに、(b)の支離滅裂の言い立てにおいては、陳述そのものの破綻・発散が主張されている。それは気づきを促すのでも、結果を断言するのでもない。言うならば、論理やアイデンティティに還元できない否定性を呈示する拍手の振る舞いであり音である。問答拍手は、これらの強烈にネガティブな反応を表現する拍手を、頻繁に介在させることにより、熱を帯びていく。問答におけるこれらの拍手のあり方は、他の地域の拍手にも類似例が見出されておらず、筆者がこれまでに研究してきた拍手機能の適用のみによっては十分に説明できないものである。

7-5 否定性の表現としての手拍ち

では、ネガティブなはたらきを持つ(a)の間違えの言い立て、(b)の支離滅裂の言い立てを、どう考えれば良いのだろうか。筆者の考えを述べておこう。

まず、(a)の間違えの言い立ては、答者の間違えと敗北を断言し、恥を認識させる。しかし、間違えや断言といっても、それらは言い立てられた状況においてのみの間違えであり断言である。拍手に求められるのは、間違えを効果的に思い知らせるはたらきである。

そこで、(a)の拍手を次のように考えたらどうだろう。すなわち、(a)の断言の拍手は、いわば、意味を持たない「空(から)」の記号である。しかし、この空の記号が、鋭利な言葉と強い音とともに発せられるときに、拡張しようとする言葉を取りむすび勢いづける「決め」としてはたらくのだと。そして、この決めに効果的にするために、問者は、振りかぶって強烈な打撃として手を拍つのである。このようにして、答者にも観客にも、断言された間違えが知らしめられる。問答においては、手拍ちに、形式的言語に収束しない空の記号として、陳述を示威する役割が与えられると考えることはできないだろうか。

(b)の支離滅裂の言い立てに伴う手拍ちについても述べておこう。支離滅裂という状態をわかりやすく言うなら、「それはaでない。bでない。cでない。これらのどこにも回収されない」という状態である。それは、現実的には、対象となる事象が排除されており、言葉や論理によってそれが修復不能になった状態のことである。

しかし、この修復不可能になった支離滅裂な言い立てを取り持つ(取り持たれている)音や音声があるのではないだろうか。それは、記号としての不定性に加えて、否定のための音表現、すなわち、支離滅裂の感覚を直接

呼び起こすような音や音声でなければならない。シールクスマは、右手の甲で左掌を拍つ手拍ちを真似てみると、痛みを伴う熱を持ってくと述べたうえ、手を拍つことの意味よりも、その身体的な変容のゆえに、この拍手に攻撃性を認めるのだと述べる⁴¹⁾。矛盾や支離滅裂という否定性を表現する手拍ちが根拠を得るとすれば、空の記号であることに加えて、問者にも答者にも、身体的変容として訴えてくる手拍ちではないだろうか。否定性の表現としての手拍ちのあり方は、音であるとともに、痛覚、触覚、温度感覚などに訴えてくる表現であるのかもしれない。今後の課題として指摘しておこう。

7-6 ブーイングからブラヴォーへ

最後に、問答拍手に代表されるようなネガティブな感情を表現する拍手についての、筆者の現在の考えを述べておこう。筆者は、客席から舞台に向けて発せられる拍手と掛け声を調べているが、瞬間的に掛かる短い声においては、その強度が、ポジティブにもネガティブにも振れる場合があると考えている。すなわち、客席から舞台に向けて、ブラヴォーかブーイングのどちらかとして発せられるのではなく、強烈なブラヴォーでありかつ強烈なブーイングとして発せられる掛け声が、存在するのである。このあり方については、稿を改めるつもりであるが、問答における問者の拍手が、本稿で検討したように、多くの場合、答者を罵倒し嘲笑するネガティブな拍手として拍たれているとしても、その強烈な打撃は、ポジティブな反応にも転換しうる振れ幅を持っていると考えてはどうだろう。そう考えるなら、答者や他の僧侶は、暴力的にも受け取られる攻撃的な拍手音を、智慧の獲得を促すポジティブな反応の振る舞いとして認識するとことのできるのではないか。まだ、確証の段階ではないが、論者達が最終的にそれを知的ゲームであると述べている事実が、何よりこの仮説を支持していると考えている。

8 おわりに

本稿は、チベット仏教の問答で拍たれる拍手について、映像分析やインタビュー調査も踏まえ、拍手行為のあり方としてどう認識し評価するべきかを検討した。問答をしている僧侶たちは、熱狂的に手を拍ちながら、相手を叱ったり嘲ったりする。そのあり方は、賞賛や喜びを伝える拍手とは、明らかに異なるものである。もちろん、怒りとはいっても、内面を覗くことはできない。しかし、

たとえ装われた怒りであり、擬態であるとしても、そこに伴われる強烈な身体的および感情的な関与こそが、修行者に加えて、研究者の強い関心を惹きつける理由であると思わせる。

筆者は、古今及び東西の拍手に関する文献を調べており、これまでの研究で、古代世界においてネガティブな表現の拍手が拍たれていたことを明らかにしてきた。もちろん、本稿の問答拍手ほどに強力なネガティブ性を持つ拍手を、筆者はまだ他に見出していない。しかし、このような拍手がもっと拍たれていた時代が、過去にあっても不思議はないと考えている。いずれにせよ、問答拍手における攻撃的な身振りは、手を拍つことが持っているネガティブな感情反応の根源にあるものを知り手がかりになる。本稿の検討は、装いを新たにしたこの拍手研究の出発点になるものであると考える。

謝辞

九州大学芸術工学府博士後期課程に在籍していた楊鵬、及び同学府研究生の劉丹萍には本研究に協力いただいた。

註

- 1) 問答拍手ではないが、村上大輔が報告する、チベット自治区ラサの呪詛祓いで観察される、ブーイングとして手を拍つ行為にも一言触れておこう（村上 2013:91）。この呪詛祓いは、僧侶や在家行者たちが、数人の組となり、リズムよく手を叩きながら、誦経して執り行われる。「興味深いのは、祈禱者たちが手を叩くその仕草である。このパチパチと鳴らす音でミカを脅し退散させるらしいのだが、彼らによると、両手は互いにびたと合わせるよう平行に叩くのではなく、やや交叉させないといけない。平行にして叩くと我々にも馴染みの「称揚」や「歓迎」の意味になり、「追い返す」（zlogpa）ためには、厳密には、両掌が合わさる瞬間、やや十字になるよう交叉させて叩かなければ呪力がないという」（村上 2013:94）。村上によると、チベット文化圏で広範かつ身近に存在するこれらの呪詛祓いは、仏教がチベットに導入される以前の民間信仰に遡る。
- 2) 河口に遅れて、アルベルト・ターフェルは1905年から1908年までのチベット調査旅行の記録である『私のチベット旅行』で、クンブ僧院における問答拍手について述べている。ターフェルの次の記述から、ダライ・ラマ13世(1876-1933)自身が、攻撃的な手拍ちを伴う問答に、試験官として関わっていたことを知ることができる。「僧侶の姿が、活発に行ったり来たりしながら、朗々と経典や釈義を引用し、恥ずかしそうに座っている候補者に質問を投げかけていた。標題を変えるたびに、彼は自分の伸ばした左手に、堂内に広く響き渡るように、右手を大きく拍ち合わせ、また、場内に轟くように足を踏み鳴らした。というのも、手を叩くことで三界の悪霊を追い払い、足を踏みしめることで討論者のために地獄の門が開かれるということが、古いラマ教の教理だからだ。受験生の一人が間違った答えをすると、その僧侶はす

- ぐに怒った口調になり、無能な男を黙らせあざ笑った。一度は不幸な人の頭上の輪を足で叩いて嘲笑したこともあり、すべての観客が真剣さを忘れて大声で笑っていた。居並ぶ高僧の真ん中に湾曲した口髭を生やした元気な試験官は、他ならぬダライ・ラマであった」(Tafel 1904:89)。
- 3) しかし、多田等観の『チベット滞在記』には問答拍手についての言及がない。
- 4) ラサで問答拍手が拍たれるのはセラ寺のみではない。時代は下るが、戦時中にチベットに潜入した西川一三の『秘境西域八年の潜行』には、1946年にラサのデブン(レボン)寺の修行にみられる手拍ちが詳細に描かれている。「「チョイル」あるいは「サニット」と呼ばれる教学部は、全ラマが入学しなければならぬことになっている。ラマ廟を参観するとき、ひとりのラマが数人のラマ達の前に立ち、数珠を振り、あるいはそれを首や腕に掛け、袈裟は腰のまわりに巻き、双手を拍ち、威嚇、喧嘩する如き形相で、「答えよ！答えよ！」「早く！早く！」とチベット語をもって法苑で喚いているのを見るのは、この学科である」(西川 1991:79)。西川は一年生の集まっている円陣に加わった。「各学級はひとりのラマを上座にして、その両側に円陣をつくって坐り、ひとりがダゴム、帽子を脱いで、数珠を手に立ち上がり、静々と上座の前に進む。数珠を腕にかけ、両手を上下向かい合わせて拵げ、そり身になって左足を少しあげ、「チーチ、ダワ、チョエ、ジュン(宇宙間如来の真法において)」と論じて、ボンと手を打ち、左足を踏みつける。その勢いの激しさは驚くほどである。そしてかけている袈裟を腰に巻きつけ、また両手を打ち左足を踏み込んで「仏は人なりや否や」と問を発する。上座に坐っているのが答者で、立っているのが問者である。答者はその間に、「人ではない」と答える。問者はその答に対し、また手を打ち足を踏み込み、「しからば、釈迦は人ではなかったのか」と発する。「人である」「しからば、釈迦は仏ではないのか」と問答は繰り返されてゆく。議論がたけなわになると問者は、食いつかんばかりの身振りで、質問を連発する。答者は手を振り「そんなことがあるものか」と言ったように反発する。その光景はさながら、口喧嘩、とっくみあいでも始まろうとするような勢いである。この両者の物凄い勢いは煩悩の心を打ち破って、それが心の地獄を滅却するために、勇気凜然たる形を表わし、その形を心の底まで及ぼして解脱の方法とするためである」(西川 1991:82-83)。
- 5) 本稿では原綴の併記は省略した。
- 6) ラブテンは異なる学堂間での問答の経験を、「私が座って答論をしていると、同じ学堂からやって来る他の僧侶たちが見学に來た」(ラブテン 1984:178)と記している。
- 7) 問答は高く大きい声での文殊師利の儀式的呼び出しから始まるが、問者はその後、低い声で問いを発する。
- 8) レンバートは、頭上に振り上げた右手は、無知を切り裂く文殊師利の剣であると述べる。但し、右手の振り上げが、拍手の事前であるか事後であるかについては書かれていない(Lempert 2012:55)。
- 9) ターフエルとシールクスマも河口とほぼ同様の見解を示す。ターフェルは、「手を拍つことは三界の悪霊を追い払う」(Tafel 1904:115)、シールクスマは、「鋭い拍手は次の再生への地獄の扉を閉める」(Sierksma 1964:137)と述べている。
- 10) 毎日2回の中庭の問答とは異なる僧院の大きな年中行事である。毎晩の問答は2つに分かれ、2回の45分間の問答には、それぞれ2人の地元の僧侶が問者となる。ラマの転生者としての地位を持つ参加者に、答者の役割が与えられ、答者の立場は、問者の立場よりも地位が高い。一人は皆の前で1対1で討論を始め、もう一人は経文を唱えた後に加わる。その後は誰にでも開かれた場となる(Lempert 2012:57)。
- 11) 他方、答者の応答は、問答を通して減速する傾向がある。問答の後半になると、答者は問者に挑戦もするが、このやり取りの別の瞬間に、

答者は視線を逸らしてから、座席で体を揺する。こうして前のターンでの行動とバランスをとろうとする。レンバートは、答者で印象的なのは、問者への反論よりも、落ち着いた態度であると述べる(Lempert 2012:74)。

- 12) 拍手研究のためにチベットの問答拍手の検討がはずせないと筆者が認識したのは2016年に遡るが、2020年8月現在に至るまで、現地調査の機会を得られていない。但し、問答拍手は、多数の動画共有サイトで視聴することができる。特に、ラサのセラ寺弁経場における問答拍手については、関係者や旅行者等による多数の動画が公開されている。本稿の検討ではそれらに現れた手拍ちを検討した。以下の註には、検討した多数の動画の中で、寺院等による公式サイト URL のみを記す。
- 13) <https://www.youtube.com/watch?v=-qmFwMxQH1Q> (格魯派-辯経展示-四諦 2020年8月17日取得)。
- 14) <https://www.youtube.com/watch?v=I6xMy7AQWJ8> (覺囊派-辯経展示-中觀他空見 2020年8月17日取得)。
- 15) <https://www.youtube.com/watch?v=UJCOWs2KcrM> (笨波派辯経-題目《大乘菩薩心》 2020年8月17日取得)。
- 16) 前掲 13)
- 17) 前掲 14)
- 18) 前掲 14)
- 19) <https://www.youtube.com/watch?v=9cyFjpk2z4c> (第十六屆噶舉冬季辯経法會 2-1: 礪學篇 2020年8月17日取得)。
- 20) 「チー、チー、チー」の意味について、ドレイフスは「なぜ? = why」であると述べるが、レンバートは意味ははっきりしないと述べている。
- 21) <https://v.qq.com/x/page/j0175p0sh05.html> (陀樂寺“般若”學位博士試験 2020年8月17日取得)。
- 22) <https://www.youtube.com/watch?v=rcZmtMt04r8> (第十六屆噶舉冬季辯経法會 2-2: 決賽篇 2020年8月17日取得)。
- 23) <https://www.youtube.com/watch?v=B4lmtSIoA6M> (寧瑪派辯経-題目《四諦》 2020年8月17日取得)。
- 24) 前掲 13)
- 25) 前掲 13)
- 26) 前掲 23)
- 27) 前掲 19)
- 28) 前掲 22)
- 29) 前掲 15)
- 30) 前掲 23)
- 31) 前掲 22)
- 32) 前掲 22)
- 33) 前掲 14)
- 34) 拉科等は、塔爾(タール)寺の問答について、「もし問者が經典に精通し弁論が巧みで、答者に言葉を窮せしめるならば、觀衆は問者の勝利に拍手する。もし問者が立論点に精通せず、答弁拙く、沈黙が生じると、答者は拍手して歡呼する」と述べ、問答拍手と通常の拍手とを区別している(拉科・益西多傑 2014:74)。
- 35) レンバートは、問者が右手を、座している答者の頭上で、時計回りに動かす動作(掌は下向)は、(b)と同様に支離滅裂を表すと述べている。
- 36) ドレイフスは、問答の動機を純粹と呼ぶことをためらう人がいることを認めている。修行僧たちは、一般の人々と同じように、複雑な理由で行動する。真面目な知的および宗教的利益は、個人的な嫌悪や野心を排除するものではない。教師もそれがわかっているので、嫌悪や野心が修行僧の主な関心事にならない限り、答めたりしない(Dreyfus 2003:381)。ドレイフスはまた、自らの12年間の問答経験のなかで、時々虐待が行われたり、敵を傷つたり屈辱を与えようとしたり、本

気で激怒する人々を見てきたとも述べている (Dreyfus 2003:220)。

- 37) スタンの『チベットの文化』には、「討論の勝利者は同僚の肩の上へのせられ勝ちほこり、往往にして—その様子から察すると—敗者をはずかしめる (シッキムでは敗者は四つ足になってはいまわり、勝者がそれにまたがり、足でわき腹をけて走らせるのがみられた)」(スタン 1971:167) とある。
- 38) ラブテンはまた、次のように述べている。「私の師匠はまたもはや偉大な智慧を働かせた。きわめて難解ないくつかの概念を私に詳しく教授した後に、上級の課題を勉強しているけれどもそれほどとびぬけてはできない年長の僧侶を選んで、私にその僧侶たちと問答させたのだった。私の質問に答えられないでいる彼らを見た時、それまでの気の落ち込みはきれいに吹き飛んでいたのだ」(ラブテン 1984:69)。
- 39) レンバートによると、経験豊かな僧侶が、答者と問答を望むとき、猛烈に手を拍つ代わりに、座って指を鳴らす傾向がある。拍手が発生してもそれは弱い。上級僧侶に求められるのは、1) 座位姿勢の保持、2) 問者に期待される動作を弱め抑制することである。地位の高い僧侶は、そうでない問者のようには振る舞わないのである (Lempert 2012:60)。
- 40) 伴信友の「避手」の解釈として同論文の註 36 (矢向 2019:39) で示唆的に述べておいた。
- 41) ラブテンも手拍ちの痛みについて「これらの徹夜の問答は実につらいもので、特に、冬には風や雪が膚を突き刺す寒さだった。私の両手は問答で手を打つごとに痛くなってきて、ついには両側が裂けて血がにじんできていた。この問答道場には屋根がなく、明かりも数個のバターランプだけで、それも夜中ごろには絶えてしまうのだった」(ラブテン 1984:88) と述べている。

引用文献

- 1) Cabezón, José and Dorjee, Penpa, Sera Monastery, Wisdom Publications, 2019.
- 2) ダライ・ラマ『ダライ・ラマ自伝』山際素男訳、文春文庫、2001.
- 3) Dreyfus, Georges B.J., The Sound of Two Hands Clapping: The Education of a Tibetan Buddhist Monk, University of California Press, 2003.
- 4) 河口慧海『チベット旅行記(三)』講談社学術文庫、1978.
- 5) Lempert, Michael, Discipline & Debate: The Language of Violence in a Tibetan Buddhist Monastery, University of California Press, 2012.
- 6) 村上大輔「悪霊ミカ祓いの祈祷書 Mi kha'i bzlog 'gyur 校注」『国立民族学博物館研究報告』38(1)、2013:91-118.
- 7) 西川一三『秘境西域八年の潜行(下)』中央公論社、1968(1991).
- 8) Perdue, Daniel E., Debate in Tibatan Buddhism, Snow Lion Publications, 1992.
- 9) ラブテン, G., ウォレス, A. 『チベットの僧院生活：ゲシェー・ラブテンの半生』小野田俊蔵訳、平河出版社、1984.
- 10) Sierksma, Fokke, “Rtsod-pa: The Monachal Disputations in Tibet.” Indo-Iranian Journal, 1964, 8(2). 130-152.
- 11) スタン, R. A. 『チベットの文化』山口瑞鳳・定方晟訳、岩波書店、1971.
- 12) 多田等観『チベット』岩波新書、1942.
- 13) 多田等観『チベット滞在記』講談社学術文庫、1984(2009).
- 14) Tafel, Albert, Meine Tibetreise, Union Deutsche Verlagsgesellschaft, 1914.
- 15) 矢向正人「拍手の起源を探る」『芸術工学研究 24』2016:21-41.
- 16) 矢向正人「天の逆手：古事記の国譲りに現われた手拍ちの検討」『芸術工学研究 31』2019:19-31.
- 17) 楊鵬・矢向正人「中国の拍手に見られるネガティブな感情反応」『芸術工学研究 32』2020:9-29.
- 18) 拉科・益西多傑『蓮花聖地：塔爾寺』青海人民出版社、2014:72-74.